

第18回

文人の恋

巖谷一六と野口小蘋

(秋季特別企画展の調査成果をふまえて)



2021年11月16日(火) 10時00分～

講師；寺前公基 (観峰館学芸員)

◇今日の講座の目的◆

- 巖谷一六、野口小蘋の合作作品について
- 巖谷一六の日記に見える、野口小蘋について
- 明治期時代の文人同士の交流について

野口小蘋の経歴とギモン

野口小蘋（1847～1917）は、漢方医の父のもと、大阪に生まれました。幼い頃より書画に親しんでおり、その才能を見抜いた父により、8歳の時から絵を習っていました。絵の修行のため、北陸方面から名古屋へと移動している際に、父が亡くなります。それは文久2年（1862）の年で、小蘋は16歳でした。父の3回忌を終えるまで名古屋に滞在し、**慶応元年（1865）、残された母を養うために、八幡（現在の近江八幡市）で絵を売って生活をします。**

その頃、京都の画家、日根対山に絵を学んでいます。それによって、多くの文人と交流をはじめ、**その中に巖谷一六がいました。**

当時は、「玉山」と名乗っています。彼女が小蘋と名乗るのは、それ以降で、明治時代には小蘋と名乗っていたようです。

明治4年（1871）、東京へ移住し、画家として本格的に活動し、明治皇后の御寝殿の絵画などを手がけました。

明治10年（1877）、31歳の時、山梨県で「十一屋」の屋号を持つ酒造業の、野口正章と結婚します。翌年には、長女であり、後に弟子となった野口小蕙が生まれました。

野口小蘋の経歴とギモン

○小蘋は、母を養うために八幡（現在の近江八幡市）で絵を売ったとあるが、なぜ八幡という場所を選んだのか？

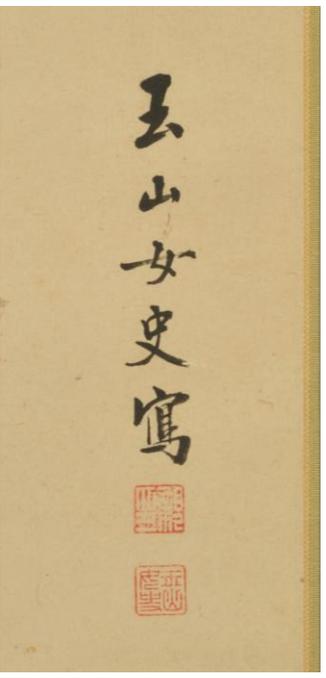
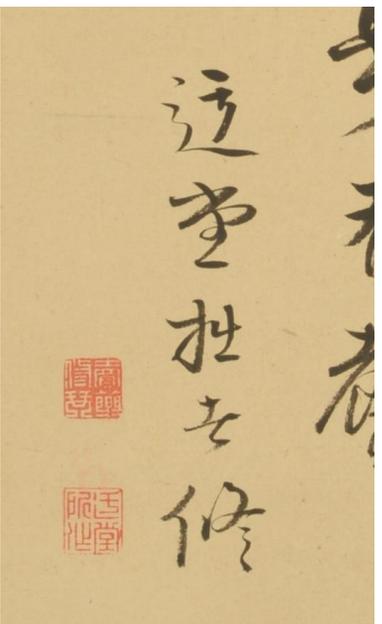
○日根対山や他の文人たちとの交流はいくつか明らかとなっているが、巖谷一六との交流については、曖昧なママである。



次のような絵が見つかった。

巖谷一六賛 野口小蘋画 「月琴桂花図」

個人蔵



小蘋が「玉山」と名乗っていることから、
明治時代以前の作品と分かる。

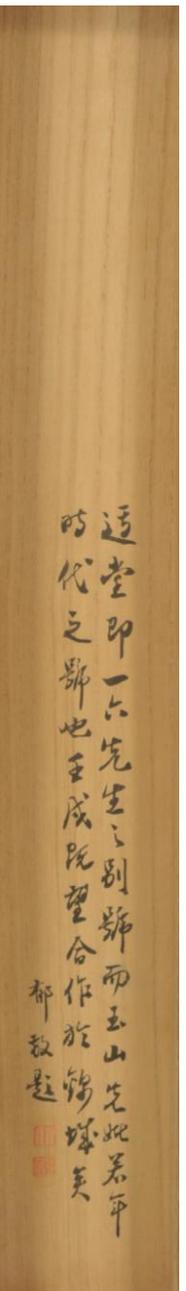


巖谷一六賛 野口小蘋画

「月琴桂花図」

個人蔵

この作品の箱の蓋の裏に、長女の小蕙が文字を書いている。



迂堂即ち一六先生の別号なり。而して玉山とは先妣（亡き母）の若年時代の号なり。壬戌既望（の年月）に錦城において合作す。

郁放題

壬戌の年・・・文久2年（1862） ←
既望・・・十六夜の日。多くは8月16日をさす。
錦城・・・??? ←

←
これまでの説では、小蘋が一六と出会ったのは、小蘋が八幡へ行く慶応年間。二人は、もう少し前に出会っている???

巖谷一六賛 野口小蘋画

「月琴桂花図」

個人蔵

この作品の箱の蓋の裏に、長女の小蕙が文字を書いている。



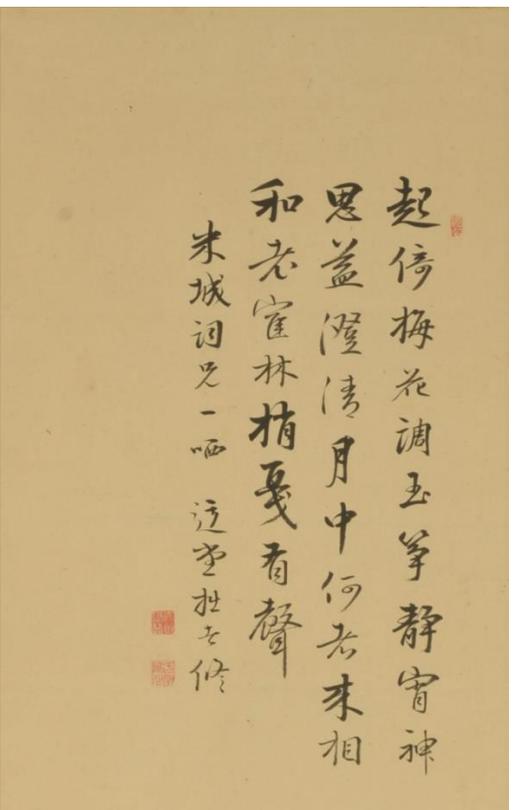
さらに・・・
文久2年（1862）というと、小蘋が名古屋に滞在していた頃である。

錦城 ↓ 金城 ←
↓ 名古屋の二つ。

← 小蘋は一六と名古屋で出会っていた！

巖谷一六賛 野口小蘋画 「月琴桂花図」

個人蔵



(一六の詩)
起倚梅花調玉箏
静宵神思益澄清
月中何者来相和
老鶴林梢憂有声



桂花と月琴



桂花（金木犀）は、
月に生えていて、
その樹を呉剛とい
う男が切り倒すと
いう伝説がある。

ちなみに・・・

小蘋は名古屋に滞在中、父の死の悲しさを紛らわすために、月琴を弾いていたという。



「楽琴書以消憂」

文久元年（一八六一）

十一屋所蔵

この時、一六は29歳、小蘋は16歳。

巖谷一六は、近江水口（現在の甲賀市水口町）

出身。

この後、小蘋は八幡で絵を売って生活をしていくが、小蘋に八幡という場所を紹介したのは、一六かもしれない。

巖谷一六日記について

近年、巖谷一六の日記が発見されました。この日記は、明治4年（1871）から明治11年（1878）にかけて書かれたものです。

この時期は、野口小蘋が東京（麹町）に移住し、画業を本格化させた時期と合うことから、小蘋の記録がないか調べてみたところ、小蘋の名前は多く登場し、64か所にもものぼることが分かりました。

また、日記に書かれた作品が、実際に残っていることも分かりました。

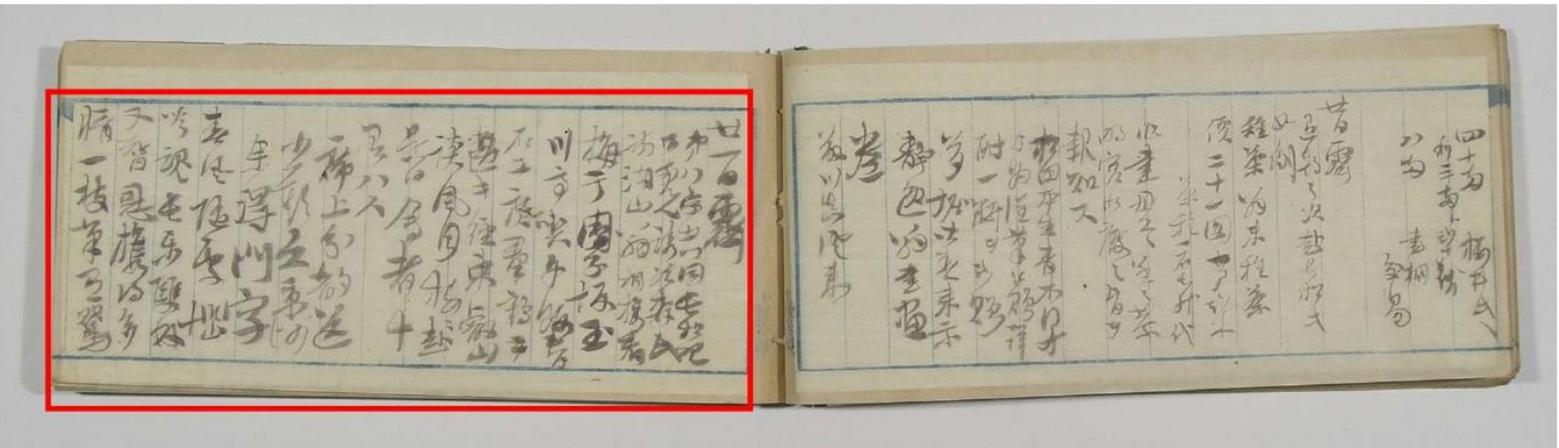
○明治六年三月二十一日条

第八字出門、同長松（幹、秋琴）、野口（松陽）両兄、誘谷森（真男？）氏訪（小野）湖山翁、相携看梅于団子坂。玉川亭喫午飯、夫より石工広群鶴ヲ過キ、経東叡山 談風月楼二赴。

是日、会者十有八人。

席上文韻、送小蘋之京師、余得門字。

春風随处恼吟魂、長楽双林又智恩。携得多情一枝筆、有鶯花寺便龍門。



廿一日霽
 第八字出陣、同長松、野
 口両兄、誘谷森氏
 訪湖山翁、相携看
 梅子因子坂。玉
 川亭喫午飯、夫より
 石工広葦鶴ヲ
 過キ、經東叡山
 談風月樓二赴
 是日、会者十
 有八人。
 席上分的、送
 小蘋之京師、
 余得円字。
 春風隨処惱
 吟魂、長樂双林
 又智恩。携得多
 情一枝筆、有鶯
 花寺便龍円。

(日記の内容)

東叡山（寛永寺）を経て談風月楼に赴く。この日、集
 まったのは、十八人。席上で韻を分けて、小蘋が京都
 行きを送った。私（一六）は、門字を与えられて詩を
 詠んだ。...

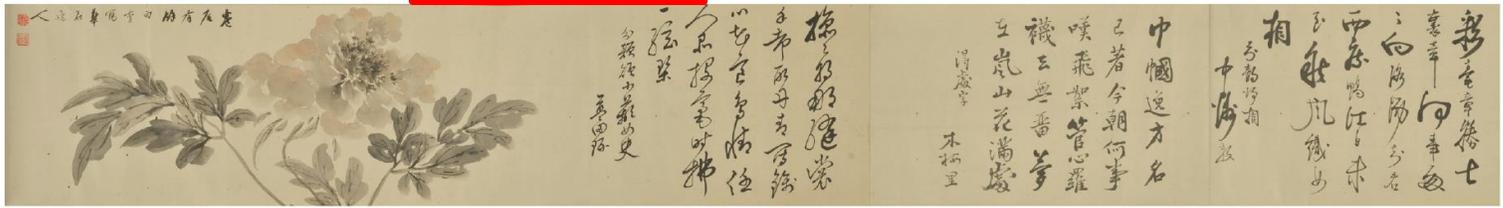
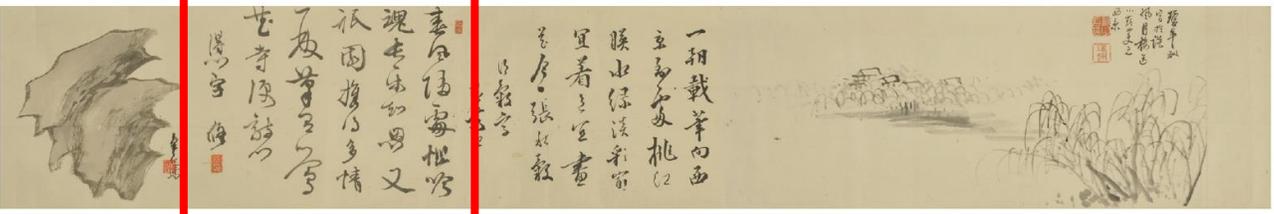
巖谷一六他

「談風月楼会卷子」

明治六年（一八七三）

個人蔵

巖谷一六、谷口講山、渡辺華石、小野湖山、松岡環翠、
 莊田胆齋、三島中洲、木下梅里、股野藍田



『巖谷一六日記』によれば、明治六年三月二十一日、浅草寛永寺近くの談風月楼にて、文人たちの集会が行われた。その席で、京都に向かう野口小菟への送別として、巖谷一六はじめ、十八名が集まり、席上にて作品を描いている。それぞれに韻を与えられ、巖谷一六は「門」字を得て、七言の漢詩を詠んだ。

この作品は、「日記」の内容に合致する作品で、十八名のうち九名の文人たちによる書画が収められている。末尾の渡辺華石の描く牡丹の賛に「巻尾に余白有り。重ねて写す。」とあるので、当初より卷子装であった。おそらくはもう一巻あるものと考えられる。

冒頭の「桃花潭水」とは、李白が友人の汪倫と別れる際に詠んだ「桃花潭の水、深さ千尺」に因んだもので、小菟との別れを惜しむ両者の親しい関係を示した言葉である。



【品山樓】
3.2×1.5cm

【修字誠卿】
3.3×3.3cm

【吟齋】
1.4×0.6cm

【修印】
1.9×1.2cm

【観文】桃花潭水
 明治六年三月念一書于
 談風月楼送
 小菟女史之
 西京
 一六居士修

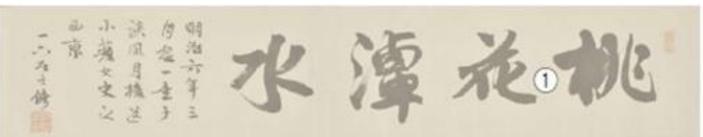
【観文】春風飄颺時
 魂長双林又
 智慧得多情
 一枝探有露
 花寺便龍門
 得字 修

赤く囲んだ部分が、一六が書いた部分。
 下の□部分が、日記の内容と合致する部分。

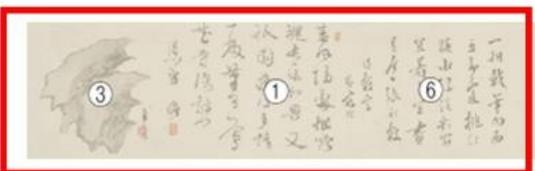
作品No. 29

談風月楼会卷子

明治六年（一八七三）作



- ① 巖谷一六
- ② 谷口藹山
- ③ 渡辺華石
- ④ 小野湖山
- ⑤ 松岡環翠
- ⑥ 莊田胆齋
- ⑦ 三島中洲
- ⑧ 木下梅里
- ⑨ 股野藍田



春風随处恼吟
 魂、長楽双林又
 智恩。携得多情
 一枝筆、有鷺
 花寺便龍門

得門 修

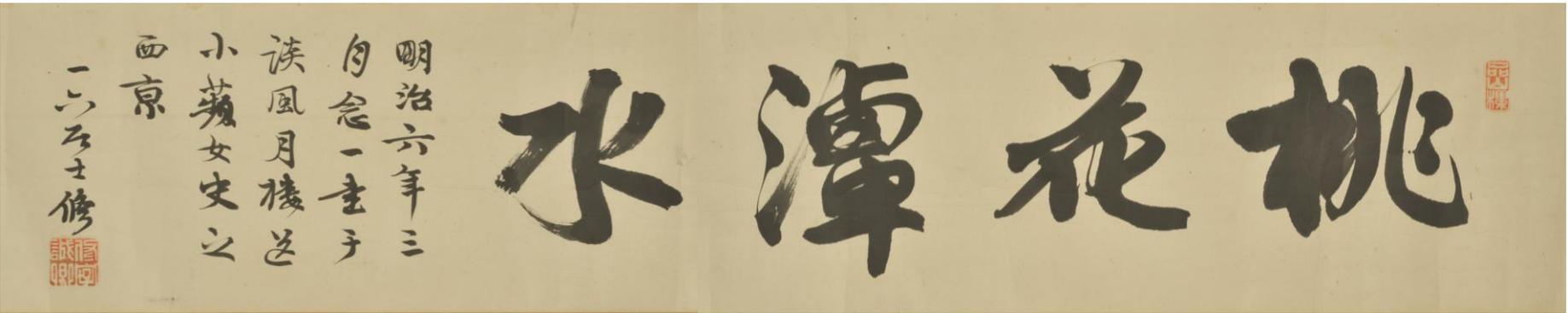
巖谷一六日記に拠ると、明治六年三月二十一日の談風月楼会にて、一六は門の字を与えられ、漢詩を読んでいる。漢詩の文言は、日記の記述と合致する。

巖谷一六他

「談風月楼会卷子」

明治六年（一八七三）

個人蔵



この卷子は、18名の中、9名が書画を書いています。ということは、元々、卷子が2つあったのですが、1つだけしか残っていないことになります。

また、「桃花潭水」とは、唐の時代の詩人・李白が、友人との別れを詠んだ「桃花潭の水、深さ千尺」に因んでいます。

一六が、小薊が旅立つことへの寂しさを詠んだものでしょう。

二人の関係が公然のものであったのは、この卷子の冒頭を一六が書いていることからもうかがえます。

巖谷一六日記に見える野口小蘋の記事

○明治6年4月6日

携妻児及小蘋女史、浅草、上野ヲ歴遊。浅草ニ於、曲馬ヲ觀ル。夜九時帰宅。

○同 4月8日

金百円、従塚本氏借入、七月限ノ約。(中略)内二十両、小蘋かし。

○同 10月10日

小蘋氏ヨリ書状来、尾州亀崎より発。近日伊勢へ遊ヒ、夫ヨリ西京赴クノ旨ヲ報知ス。

○明治7年5月6日

小蘋来宿。

巖谷一六日記に見える野口小蘋の記事

○明治7年6月27日

今朝第十時過、産女兒、母子両安。退朝後在宅。出産見舞トシテ、周作妻、小蘋、堀氏等来。

○同 6月28日

今夕、同日下部、武藤、訪小蘋新居。

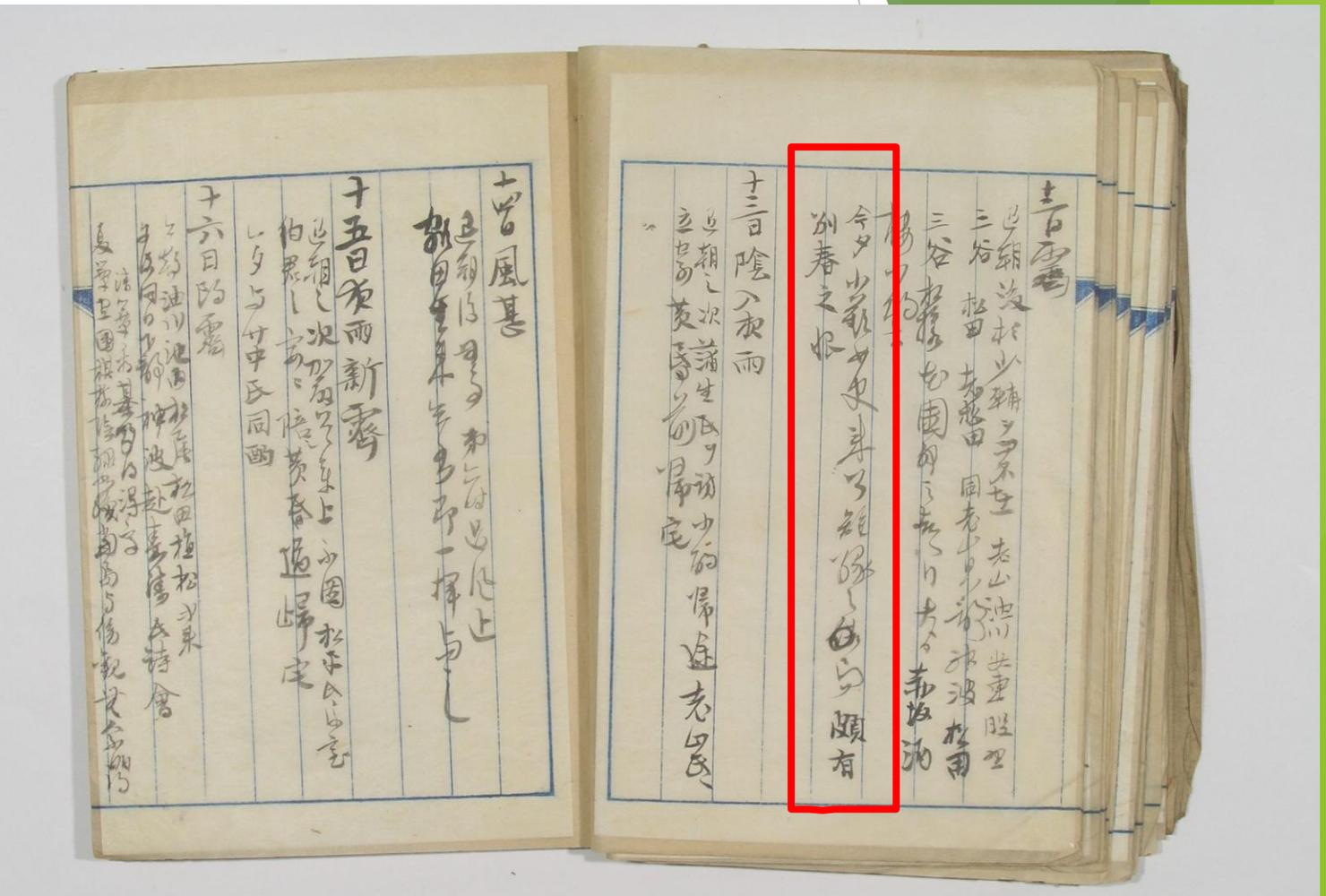
○同 9月14日

小蘋女史より贈葡萄。

(明治8年に入ると、記事が少なくなる。)

○明治8年 3月2日

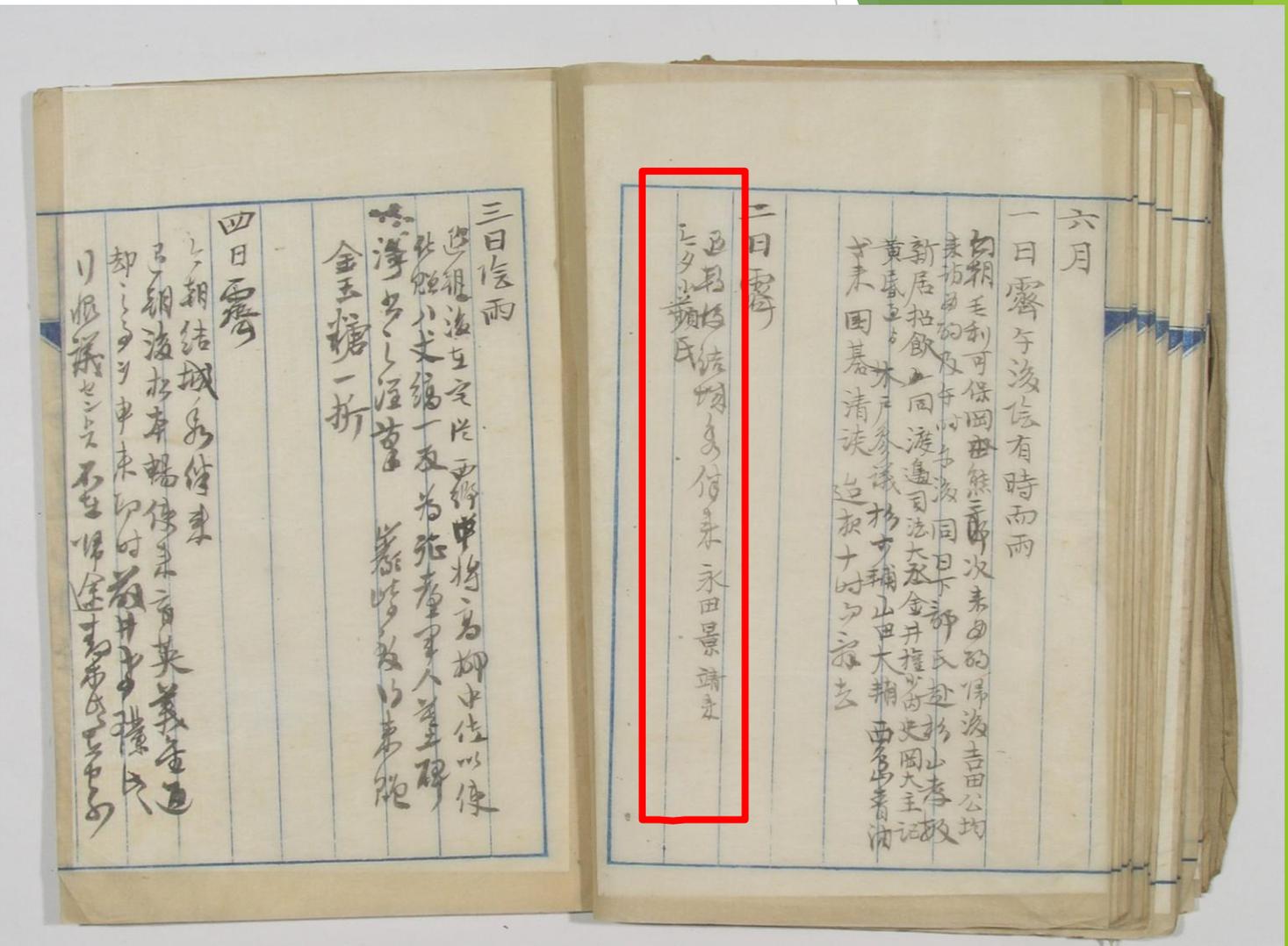
来客、矢土勝之、関屋善平、毛利束、各留酌。松邨氏来。



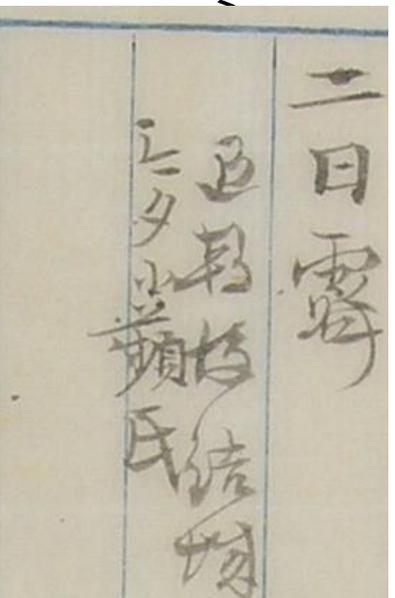
○明治八年五月十二日条
今夕、小蘋女史来り了んぬ。離縁の局、頗る別春の恨み有り。

○明治八年五月十二日、小蘋より「離縁」を切り出される。そのことについて一六は、「別春の恨み」と書いています。

恐らく、一六の書き方からすると、別れを切り出されたのは想定外のことだった？



○明治八年六月二日条
 退朝後、結城秀伴来。
 今夕、小蘋氏・・・



この日の夕方、小蘋と一六は会っていたようである。
 しかし、内容を書いていない。

か。書いていないというより、書けなかったのではない

巖谷一六日記に見える野口小蘋の記事

(明治9年は日記が残っていない)

○明治10年2月13日

今夕、小蘋氏来、為**新嫁**祝贈八丈島一反、金一円。

○同 2月26日

小蘋氏来告別、且属書。

○同 10月18日

退朝後、小野湖山、**松邨小蘋**来留酌。作書数幀。(中略)小蘋被贈山梨産月露菓、及家醸麦酒一餅。

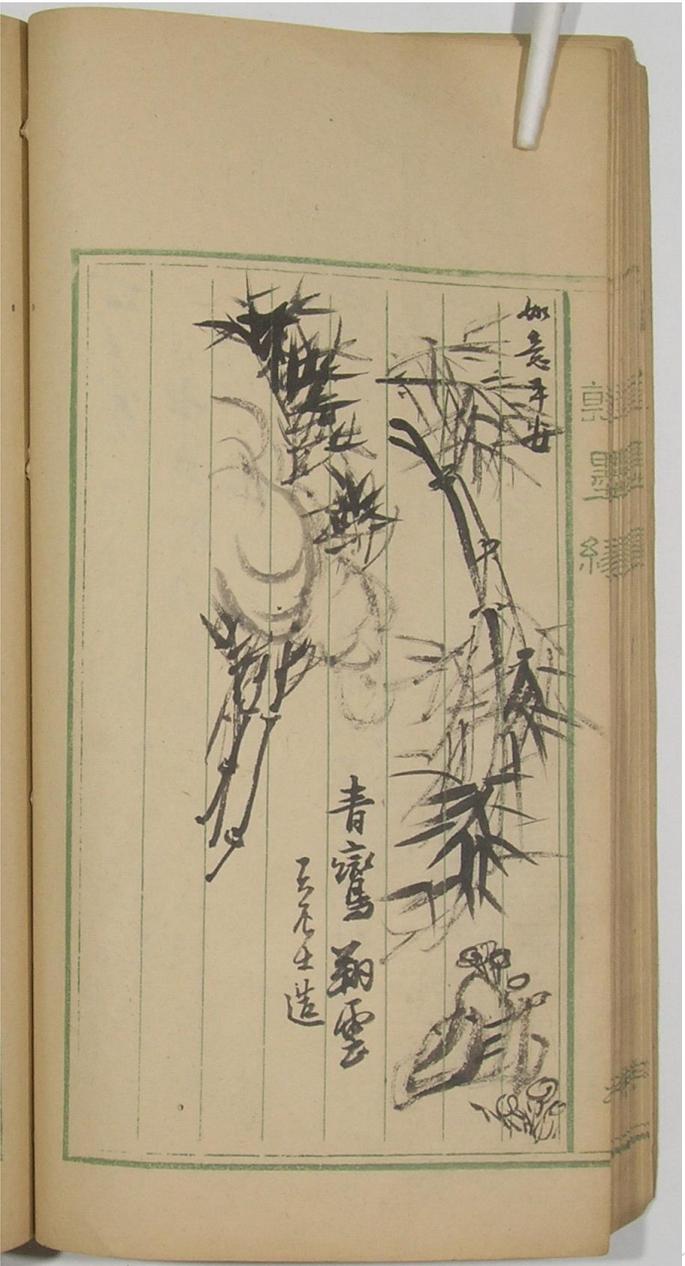
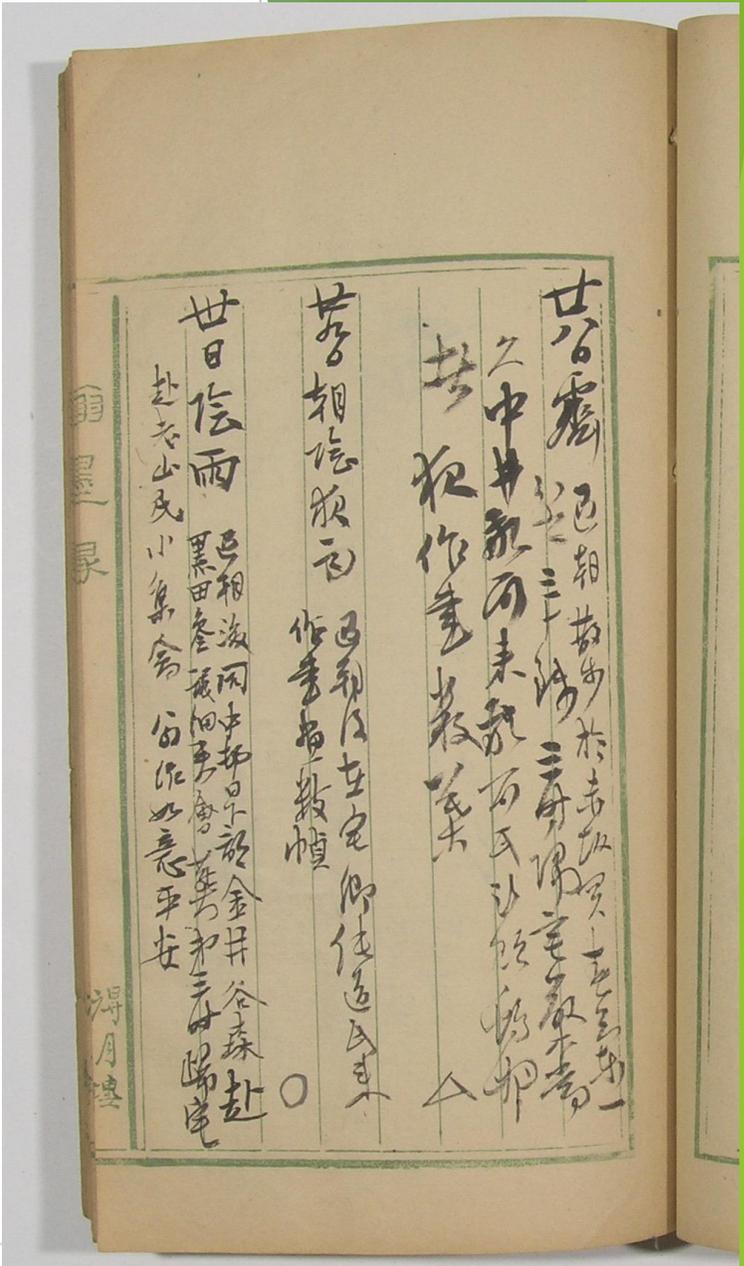
○明治11年8月19日

山梨県**野口小蘋**氏ヨリ書翰来。

○同 10月18日

野口小蘋より書翰来、乞書。

← 明治11年1月11日、長女の小蕙が生まれている。



○明治十一年三月三十日条
(安田)老山氏小集会に赴く。翁(老山)、「如意平安」の絵を描く。

日記の続きに、老山が描いた「如意平安」を模写している。

絵には、「如意平安」の他に、「青鸞翔雲／老居士造」とも書いている。

巖谷一六

「如意平安図」

明治十一年（一八七八）

個人蔵



この作品は、「錦雲老兄」に贈った絵で、錦雲とは、野口正章のこと。正章は、野口小蘋の夫である。

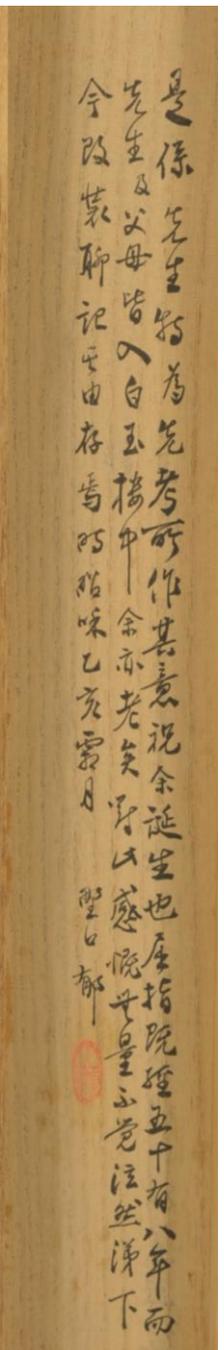
この作品にも、箱蓋の裏側に、小蕙が由緒書を書いている。 ←

巖谷一六

「如意平安図」

明治十一年（一八七八）

個人蔵



（内容）

これは、係（修？）先生の所持品で、亡き母のために作られたものである。その内容は、私（小蕙）の誕生を祝うものである。私は58歳を迎え、既に先生や父母は亡くなつてしまった。私もまた年を取つた。この作品に出会つたとき、感慨無量であり、自然と涙がこぼれていったのである。今、この作品の表具を改め、この作品の由緒を記すものである。

この作品は、小蕙の誕生を祝つて、一六が小蘋に贈つたものと分かる。

巖谷一六

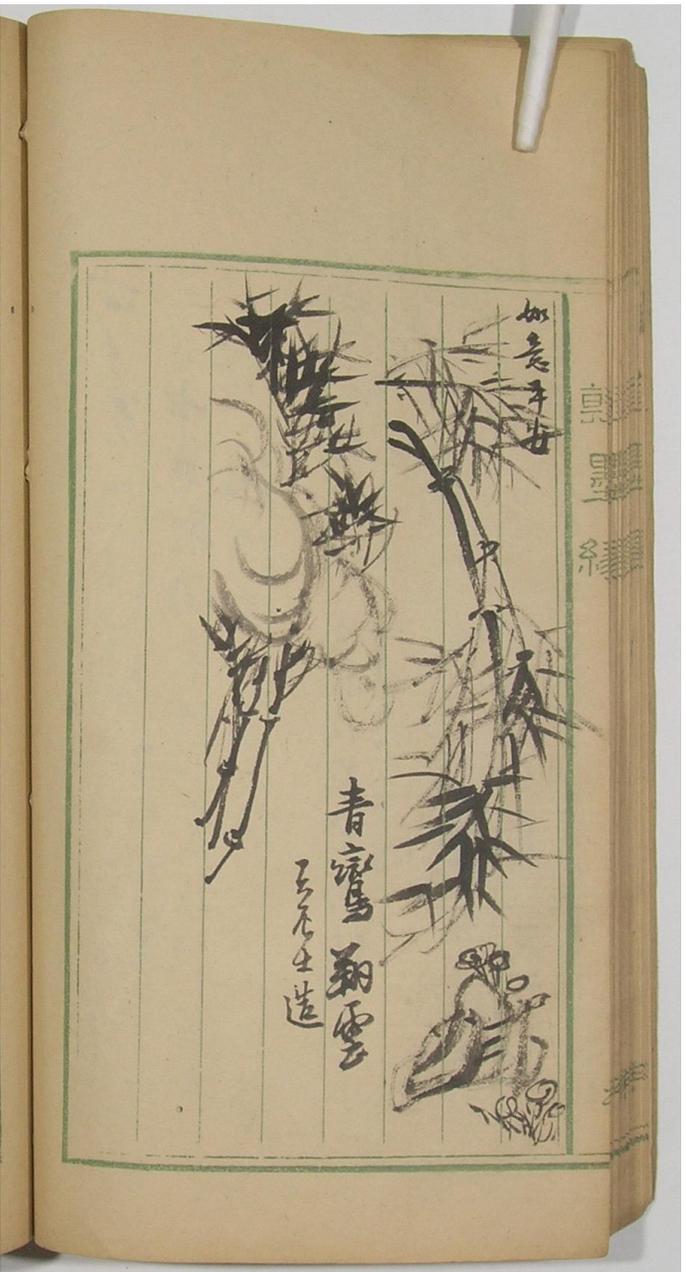
「如意平安図」

明治十一年（一八七八）

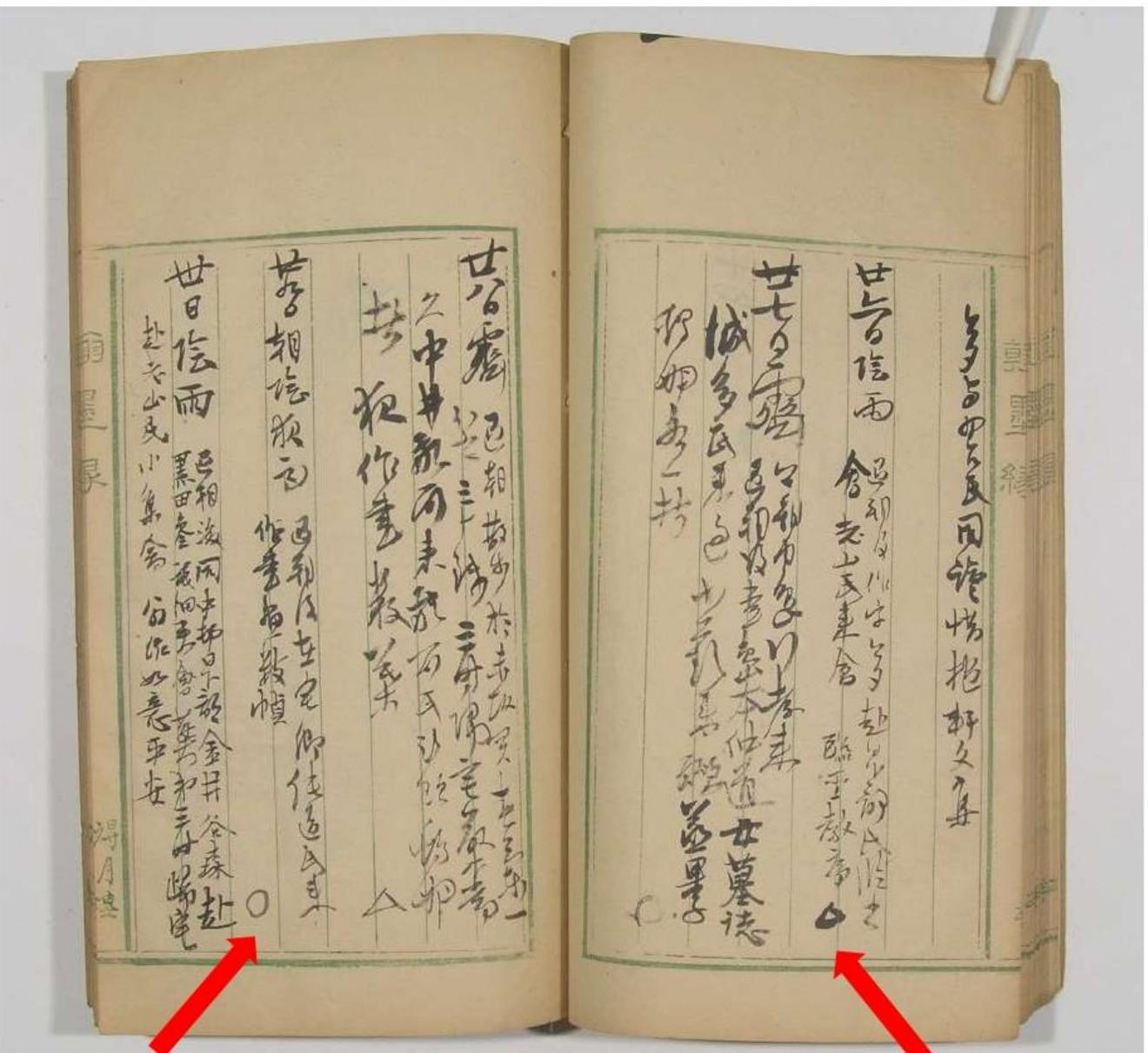
個人蔵



『巖谷一六日記』明治十一年三月二十日条



作品No. 27 巖谷一六日記 明治十一年（一八七八）三月条



この三月条には、記事の終わりに△や○の印が書かれている。これは、一六のその日の体調を表しているものと思われる。また、末尾にその印を書いていることから、日記は、その日の終わり、もしくは、翌日に書いていることも分かる。

今日の講座のおさらい

巖谷一六と野口小蘋の関係

○一六と小蘋とは、文久2年8月の段階で、共同で作品を作っており、既に知り合いであり、それ以前から交流を深めていた。

○その交流は、明治時代に入っても変わることなく、日記を見る限り、親しく交流していた。

○明治8年5月、一六は、小蘋から別れを切り出される。その理由ははっきりはしないが、日記の書き方を見る限り、2人は恋人関係にあったと想像できる。ちなみに、このとき小蘋は29歳である。

○ただし、これで2人の関係が途切れる訳ではなく、小蘋が野口正章と結婚した後も交流は続いており（関係性は変化したであろうが）、長女が生まれた際には、一六より「如意平安」の絵が贈られている。

巖谷一六と野口小蘋の関係

右の絵は、小蘋が一六の邸宅である「歙霞楼」を描いたものである。

この絵は、一六が亡くなった後に編集された「一六遺稿」や「歙霞楼印存」など、一六を偲ぶ著作の冒頭に載せられている。

二人の交流は、恋人から文人同士の交流に変化はしたが、その関係はずっと続いていったのである。



ありがとうございました！

観峰館は、11/23日より休館します。

ホームページ上では、「Web展覧会」を開催します。
ぜひご覧ください。

12/11（土）～2/28（日）

- ・ 楊峴の書

- ・ 揚州の山水画家 程遠岑

観峰館ホームページよりご覧ください！

観峰館